

はしがき： 声と耳に関する断章

本書の課題

本書は、社会学における相互行為論の見地から、色覚少数者がいかに語りづらい状況に置かれてきたか、考えてみたものです。その問題設定と対応して、人間の部類分けがなされる中で私たちがいかに語り、聞くことができるかについても、考えてみました。

というのも、色覚少数者は、ただ色覚の特性を指摘されるばかりではなく、そのことによって疑念にさらされ、発言権を剥奪されてきた存在だったからです。また、その事態は、今日において見えづらい形となり、あるいは別の形をとって、存続しているのではないか、いやむしろ悪化しているのではないかと想像できるからです。

といっても、当事者はこう語るべきだと指示しようというわけではありません。「当事者本意」の「優しい社会」が言われるわりに、この息苦しさは何なのか。まずはその胸のつかえについて考え、もつれた糸を解きほぐすことで、喉に出かかった声を言葉にし、あるいはこうも言えないかと別の選択肢を浮かび上がらせ、すこしは溜飲も下がるし明晰になる。当事者でない人も、話を聞く耳が変わり、自分に対する態度が変わって、自分の当事者性を探し始める。そういうふうにしたいたいというのが本書のねらいです。

ここにいう色覚差別とは社会現象としてのそれです。眼科的事実の真偽について議論するわけではありませんし、人の「意識」や心理現象としての差別をとりあげるのでもありません。では社会現象としての差別とは何なのか。その一端を、色覚の場合に即しつつ、相互行為論の見地から、考えようというわけです。

解釈と推敲

生きづらさや息苦しさを感じていて、「わかってほしい」「改めてもらいたい」という気